Appendix

東京2020大会に向けた取り組み

『KEIO 2020 project 2017年度活動報告』

2017年３月、慶應義塾大学は、横浜市・川崎市とともに英国オリンピック委員会（British Olympic Association：BOA）と2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会に先駆けて行われる事前キャンプに関する契約を締結し た（British Paralympic Association：BPA との締結については後述）。KEIO 2020 project は、BOA・BPA のオリンピック・パラリンピックに出場するアスリートが日吉キャンパスに滞在する期間をサポートする学生ボランティア組織として2016年から活動をスタートさせている。本章では KEIO 2020 project の 2017 年度の活動を紹介する。体育研究所では、主として石手靖君、村松憲君、永田直也君、福士徳文君、稲見崇孝がチームとなって学生と向き合い、学生の主体的な活動をサポートしている。

■コンセプト・スポーツボランティア教育プログラム

KEIO 2020 project は、

- 選手をベストなコンディションで選手村へ送り出す
- 横浜市、川崎市とともに地域を盛り上げる
- 英国文化を受け入れ、日本（文化）の魅力を伝える

以上３点をコンセプトの柱として活動している。繰り返すが、学生主体の組織であることに重きを置いており、体育研究所の教員はその活動をサポートする立場にある。その背景には、2020東京大会へのボランティアとしての関わり方が関係する。2020東京大会へボランティアとして関わりたい場合、大会組織委員会ボランティアと都市ボランティアのどちらかを選択することができる。しかし昨今のボランティア参加に関する現状は応募した人に必ず参加が約束されるものではなく、履歴書を提出し、面接を経て、合格者だけが参加できる状況にある（2012ロンドン大会では７万人の募集に対し24万人が応募している）。参加の目的は人それぞれにあるが、アスリートに接する機会の多い競技関係や通訳・翻訳の役割には人気があり、希望の役割で大会に貢献できる人は極わずかであり、狭き門といえる。一方で、慶應義塾大学の学生においては、普段の学び舎日吉キャンパスに BOA・BPA のアスリートが滞在するため、アスリートを目にする機会自体はむしろ上述の両ボランティアより多いかもしれない。アスリートと接すること自体はオリンピック・パラリンピックを身近に感じるまたとない機会ではあるが、参加学生個々のモチベーションとはなっても、最も肝心なことはどうやら他にありそうである。大学在学中に大会が開催されることによって、自らが学ぶ大学を拠点として BOA・BPA をサポートする取り組みを多くの人・組織・企業の力を借りながら自らの力で計画・立案し、組み立て、展開するプロセス、現代を力強く生き抜く“生きる力”をオリンピック・パラリンピックを通じて学ぶことこそに KEIO 2020 project の真髄はある。これは、上述の両ボランティアへの参加を決して否定するものではなく、自身の大学で行う BOA・BPA との交流を通じて、大学をどのような大学にしたいかを学生自身が考える契機として捉えていることを意味している。そして大会終了後、慶應義塾大学にどのようなレガシーを残すか？どんなレガシーを残したいか？どういったレガシーを残すべきか？を学生とともに常に考え、種々のスポーツボランティア教育プログラムを計画・立案した【project アジェンダ ver.1：図 1】。その理由のひとつに、日吉キャンパスが複数種目を受け入れる点がある。上述の2017年３月時点で、日吉キャンパスは近代五種、ボクシング、テ

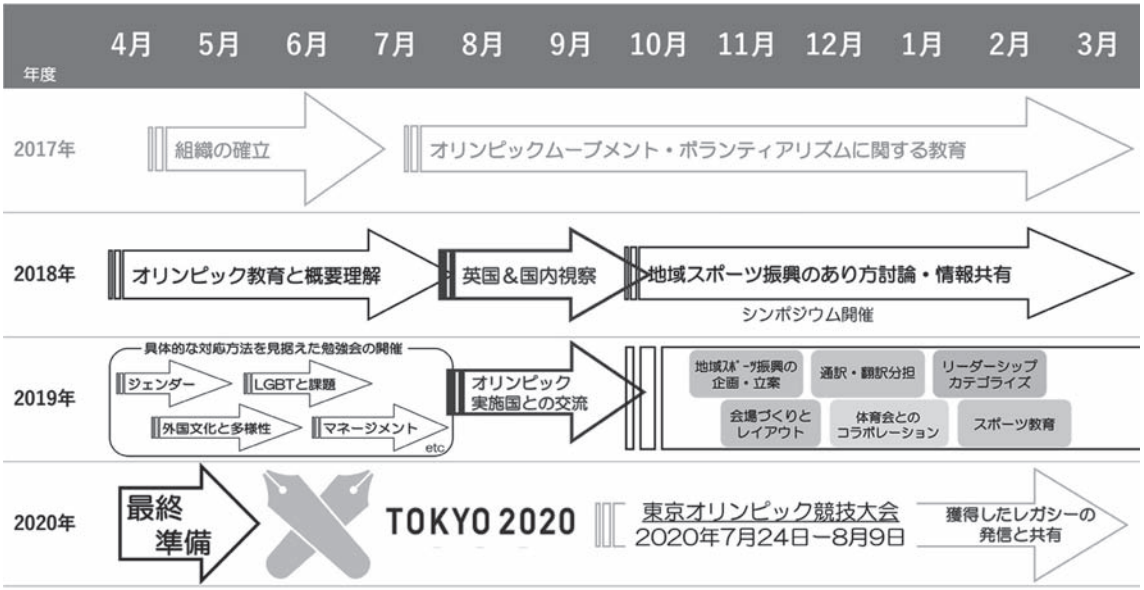


図１

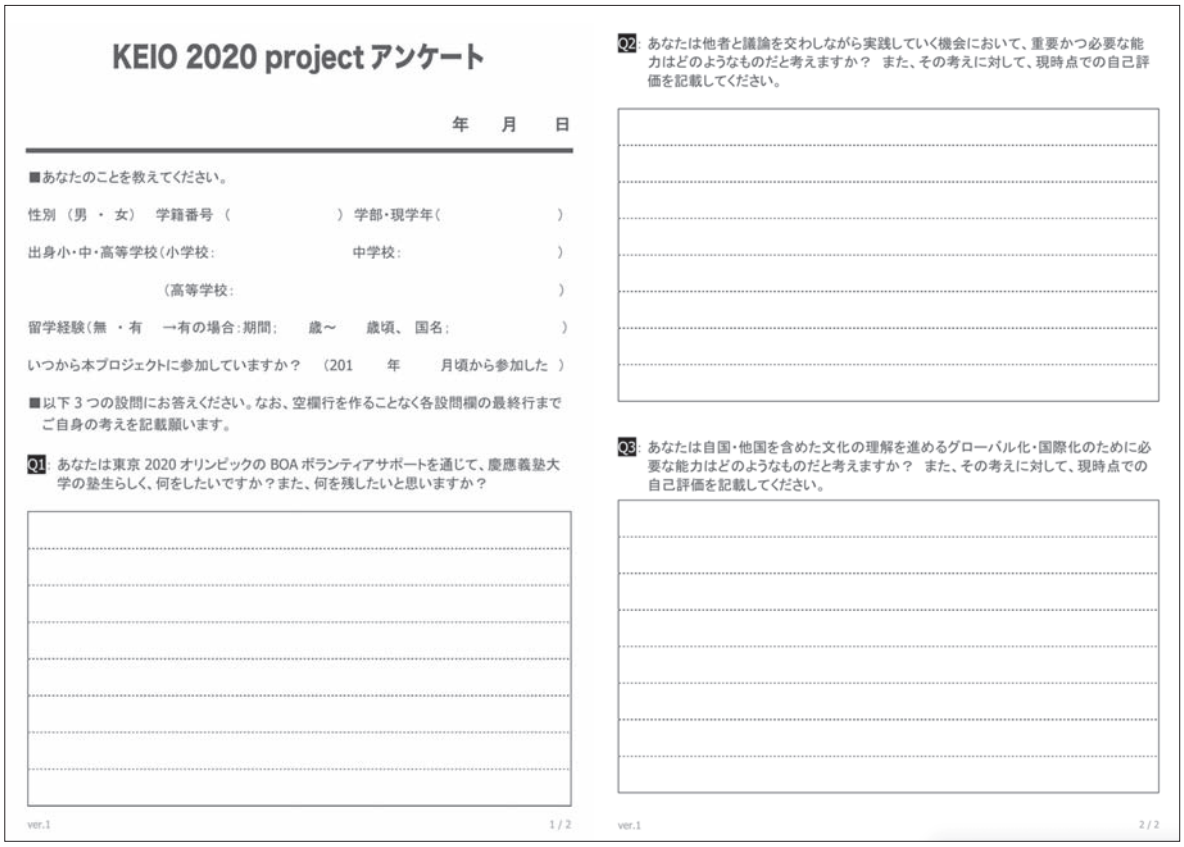
コンドー、柔道、卓球、ホッケー、ウェイトリフティング、バスケットボール、バドミントン、体操、空手、アーチェリー、フェンシングの13種目を受け入れることが決まっている。本学と同様に、行政と連携して事前キャンプ地の契約を結ぶ他大学の特徴として、体育学部やスポーツ科学部、健康科学部などの体育・スポーツ系専門学部を有している点があり、これらの大学では教養教育を基盤とした専門教育を受講してきた学生がスポーツボランティアを展開する。本学の場合、日吉キャンパスに在籍するのは文学部・経済学部・法学部・商学部・理工学部・医学部・薬学部の一部の学年のみであり、その場凌ぎで行うのには限界がある。したがって、中長期的な計画を練って活動をスタートしたわけである。なお、大会組織委員会や各都市が策定するスポーツボランティア教育プログラムの参考にさせていただく機会は大変多いが、ホストユニバーシティとして、また慶應義塾大学として大学の『らしさ』を出すためには、同じプログラムにて進行する必要はなく、上述したように、スポーツボランティア教育プログラムそのものも学生自身によって形を変えるべきであるという認識のもと、活動している。本章では、KEIO 2020 project の組織確立に向けた動きや、2017年度に開催したプログラムやイベントなどを時系列にて報告する。

■組織の確立

BOA・BPA サポートに興味のある学生の中からプロジェクトに興味があり、自らがギアとなって運営していくことを希望する学生を募ったところ、2020年を４年生で迎える１年生が多く集まった。KEIO 2020 project 発足当初（2016年夏）から参加している２～４年生数名も加わり、数時間の会議にて KEIO 2020 project の組織を確立した（図２）。図２

図２

に示したように、興味関心を持ちギアとなって KEIO 2020 project を運営していくことを希望する学生を運営委員とし、運営委員の学生をさらに 5 つの部署に大別した。BOA・BPA とのイベントを見据え各種イベントの企画・運営を主とする企画部、横浜市・川崎市・企業との連携構築を主とする渉外部、塾内外に向けて KEIO 2020 project の活動を発信していく広報部、通訳・翻訳業務を担当する通訳・翻訳部、KEIO 2020 project が資金を抱えた際に予算管理を行う会計部の 5 部署である。経済学部 1 年生の 1 名を KEIO 2020 project のリーダーとして、運営委員の学生はこのどこかの部署に所属して活動する。例えば、企画部が何かをイベントを企画した際には、各部署の代表 1–2 名でグループとなり、イベント当日までの準備をし、役割に沿った活動を展開するというイメージである。情報共有には SNS アプリの『LINE』を活用することで学生は頻回にやりとりを重ねた。運営委員の学生らが企画したイベントの当日には、事前に“運営委員ではないものの KEIO 2020 project に興味を持っている学生たち”で構成される LINE グループに情報を呼びかけ、ボランティアとして参加できるように構成した。“運営委員”と“興味がある学生”との間に大きな隔たりを作らないよう配慮した背景には、現運営委員学生らもいずれは三田キャンパスに拠点を移すことになるため、学びのステージが変わり多忙を極めてもいつでも参加頻度・貢献状況を調整できる高い自由度を設ける狙いがある。この組織構成の元、運営委員メンバーが総出となって興味関心のある学生を口コミを中心に募り、月に 1 ～ 2 回の頻度で説明会を行い、KEIO 2020 project に参加を希望する学生を募った。月に一度は必ず運営委員会を開催し、それ以外にも運営委員は KEIO 2020 project の魅力を伝えるため



KEIO 2020 project アンケート

年　月　日

■あなたのことを教えてください。

性別（男 ・ 女）　学籍番号（　　）学部・現学年（　　）

出身小・中・高等学校（小学校：　　中学校：　　）

（高等学校：　　）

留学経験（無 ・ 有　→有の場合：期間：　歳～　歳頃、国名：　　）

いつから本プロジェクトに参加していますか？　（201　年　月頃から参加した）

■以下 3 つの設問にお答えください。なお、空欄行を作ることなく各設問欄の最終行までご自身の考えを記載願います。

Q1: あなたは東京 2020 オリンピックの BOA ボランティアサポートを通じて、慶應義塾大学の塾生らしく、何をしたいですか？また、何を残したいと思いますか？

ver.1　1 / 2

Q2: あなたは他者と議論を交わしながら実践していく機会において、重要かつ必要な能力はどのようなものだと考えますか？　また、その考えに対して、現時点での自己評価を記載してください。

Q3: あなたは自国・他国を含めた文化の理解を進めるグローバル化・国際化のために必要な能力はどのようなものだと考えますか？　また、その考えに対して、現時点での自己評価を記載してください。

ver.1　2 / 2

図 3

に集まってアイデアを絞り出し、時には夜遅くまでその方法を議論した。その甲斐あってか、2017年度は約50名の学生が運営委員として活動し、254 名の学生が興味がある学生としていつでも KEIO 2020 project のイベントに参加できるよう登録した。塾内の動きとしては、BOA・BPA と直接的なやりとりを行なっている塾長室や国際連携推進室と協力し、プロジェクトを進める。なお、体育研究所としては、運営委員メンバーには図 3 および図 4 のアンケートへ協力をお願いし、体育研究手法を応用し参加に至った背景と、その変容を追跡する。アンケートは、これまで体育研究所所員が一丸となり基盤研究として遂行してきた知見をもとにしており、社会的スキル、自己効力感、ライフスキルの 3 つの観点から学生の成長を見守っている。全登録者約 250 名のうち 9 割以上が 1 年生(2020年に 4 年生)であり、9 割が女性であることが大きな特徴であった。

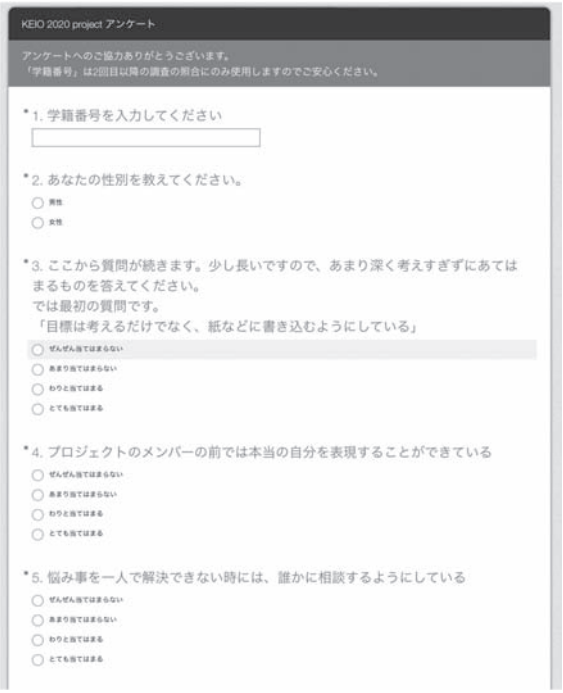


図 4

■足跡

1．『東京五輪音頭 -2020- 神奈川 ver.』の撮影（2017年10月）

前回の東京大会でも流れた東京五輪音頭の2020年神奈川県版の撮影に参加した。神奈川県知事によれば『パラリンピックの要素を追加した現代版の「東京五輪音頭」の誕生だ。世界に向けて、音頭にのせて、神奈川から「ハッピーアンドピース」をお届けします！』とある。動画投稿サイト Youtube の URL：https://www.youtube.com/watch?v=CGwZTct4ea0 から閲覧が可能である。神奈川県でオリンピック・パラリンピックに関係のある人・施設が順に踊りながら登場する。KEIO 2020 project のメンバーは動画の 1 分47秒あたりから 1 分54秒までに法被を着て登場する（図 5）。撮影当日はあいにく天候が悪く、旧記念館にて撮影が行われたが、取り壊し前の状況がわかる貴重な資料ともなった。ぜひ、ご覧いただきたい。

図 5

２．マナー講習会（図６）（2017年10月）

主として渉外部で活動する学生を対象に、今後活動の幅を広げるために社会に出た際を想定したマナー講習会を開催した。中北薬品株式会社様のご厚意により、福田智子氏（マナーインストラクター）を講師として名刺の渡し方（図７右写真）や、上座・下座の考え方（図７左）、手土産の渡すタイミングなどの実学をご教授いただいた。30名以上の学生だけでなく、教職員も参加する中、和気藹々とした雰囲気の中で講習会が行われた。のち、運営委員の多くは活動の場において名刺を持ち、凛とした立ち回りで先方とコミュニケーションをとっており、講習会の実学が活きている。

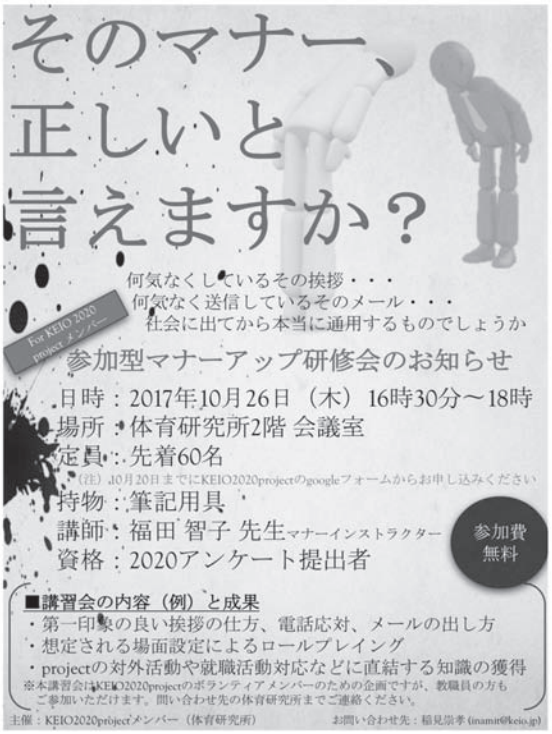


図６

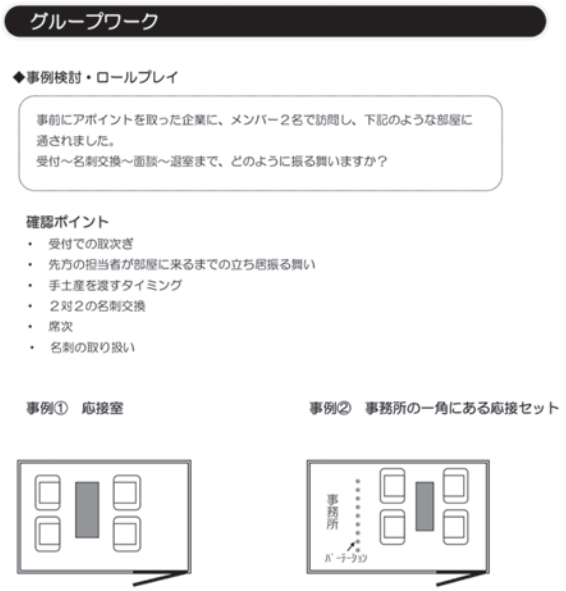


図７

３．防壁パネルアート（2017年11月）

2020東京大会の機運を高めるために、建て替え工事のために記念館まわりに建てられた高さ３ｍのホワイトバリケード(防壁パネル)へのアートシールを提案した。工程は、連日によるテーマ設定会議ののち、運営委員が中心となって下案を作成し、下案をデジタル化する作業で進んだ。中でもデジタル化する工程を苦手にする学生が多く、体育研究所の教員から手書きの絵を点打ちしてデジタル化するデジタイズ技法を学んだ。日吉キャンパスの学生のみならず、日吉キャンパスを通行する地域の方にもオリンピック・パラリンピックを感じてもらうために、ルールに関するクイズ形式のパネルや競技で使用する用具・車椅子に関するパネル、パネルの前で写真を撮り SNS 拡散を狙ったパネルなど、学生目線でオリンピック・パラリンピックを楽しむためのアイデアが盛り込まれた。約１ヶ月を擁して作成した全38に及ぶパネル（図８）には学部学年を超え多くの学生が参加した。

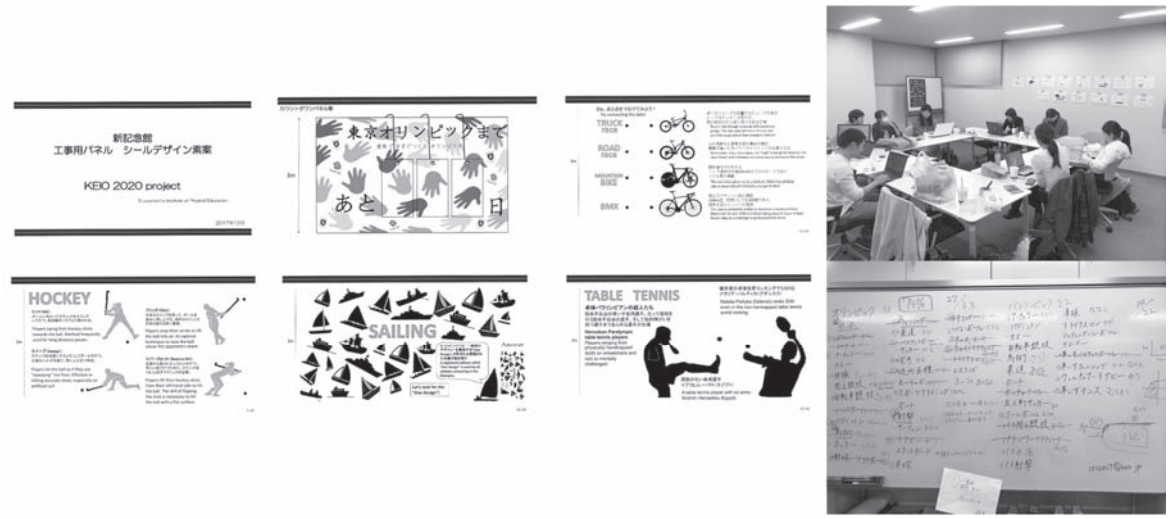


図８

４．プロバスケットボールＢリーグ川崎ブレイブサンダースでのボランティア体験（2017年11月）

学生にとって、実際のボランティアはどのように映るのだろうか。トップスポーツ現場でのボランティアを体験すべく、ボランティアのできるフィールドをプロバスケットボールＢリーグ川崎ブレイブサンダース様に提供いただいた。学生向けの説明会(図９左上)を塾内で行い、希望者は等々力アリーナで開催されている試合現場にてボランティアの実際を見学し（図 9 右上と左下)、後日異なる試合のボランティアスタッフを体験した。

５．横浜市・川崎市との連携（2017年11月～）

運営委員・渉外部の中から横浜市担当・川崎市担当を希望する学生を決定し、今後３ホストで、特にボランティアの面で交流を図っていこうという意図を持ち、まずは KEIO 2020 project の取り組みについてプレゼンテーションを行った。横浜市市民局オリンピック・パラリンピック推進課、川崎市市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室の方々に向けたプレゼンテーションを前に、体育研究所教員にスライドやスライド原稿を何度も添削されながらも完成させ、複数回の発表練習をおこなった甲斐もあり、今後の横浜市・川崎市との取り組みが加速する起点を作ることができた。

図９

６．ポスター制作・体育会とのコラボレーション（2017年12月）

英国チームが慶應義塾大学を視察に訪れた際、施設をみることはあっても、慶應義塾大学にどんなスポーツのチームが存在し、どんな歴史を有しているか、何も知らずに帰国する現状がある。少しでも慶應義塾大学のことを知ってもらうこと、また KEIO 2020 project のことを体育会のアスリートにも認識してもらうことを目的に、英国チームが興味関心を唆るようなポスターの制作に着手した。水泳部葉山部門と弓術部に取材や練習環境の見学などのご協力をいただき、まずは日本語で制作し、添削をいただいたのちに英訳する工程で進めている（図11）。

図11

7．国立スポーツ科学センター（JISS）見学（2018年２月）

日本の国際競技力向上に向け、スポーツ科学・医学・情報の分野から支援を行う拠点であるJISSを見学した。JISSは、日本オリンピック委員会や各競技団体と連携し、各専門領域の調査・研究を推進するとともに、その成果を踏まえて競技者・指導者等への支援を行っている。英国チームも日本滞在時に活用する可能性もあること、アスリートが普段行うトレーニングや貴重な測定機器・施設に関する知識を獲得することを目的とした。森下義隆氏（JISS研究員）に施設の案内から説明などすべてに渡るご協力とご配慮をいただくことができ、JISS内部の食堂（アスリートフード）や宿泊施設の見学が叶った（図12）。

8．山形県上山市横戸市長と福島県北塩原村小椋敏一村長による視察（2018年２月）

これまで組織づくりや見学・体験のために出向くことが多かったが、山形県上山市の横戸長兵衛市長と福島県北塩原村の小椋敏一村長が慶應義塾大学の取り組みとKEIO 2020 project取り組みを視察された。上山市も北塩原村も2020東京大会において他国の受け入れや交流を計画されており、多くの行政関係者が体育研究所に来館された。プロジェクトのリーダーによるKEIO 2020 projectのコンセプトや取り組みについて紹介し、プロジェクトとして協力できることなど意見交換を行った（図13）。

図12

図13

9．ボッチャ体験会の開催（2018年３月）

パラリンピック競技を地域の方へ知っていただくことを目的に、神奈川県と協力し、ボッチャ体験会を実施した。KEIO 2020 project が初めて音頭をとるイベントとなるため、当日までの準備や当日の会場運営などについて勉強するため、システムデザイン・マネジメント研究科教授神武直彦君のご厚意で１月に開催された「かながわパラスポーツ」コーディネーター養成会にスタッフとして参加・勉強させていただいた。本イベントの遂行を担当するグループメンバーが参加し、会場の作り方などについて学ぶことができた（図14上段）。さらに、２月には体育研究所教授村山光義君にボッチャについての歴史やルールなどの座学と自らが体験する機会を提供いただき、当日参加できない学生もパラリンピックスポーツについて考える起点となった（図14下段）。このように２段階のステップをクリアできたこともあり、当日は満員御礼の大盛況であった（図 15）。当日参加された方は地域の障がい者施設の方から一般健常者の方、小学生からご高齢の方まで幅広く、特に会場づくりにおいて、車椅子のタイヤを拭く場所や車椅子の幅を計算して受付を設置し、駐車場から会場までのルート確保、トイレの案内看板等まで配慮する取り組みを行った。ポスターの制作から含めた２ヶ月間は大変良い学びの場であったことと、地域の方との連携を2020年までに強固なものにし準備する必要性があることを再認識する機会となった。

図14

図15

10. 通訳・言語サービスボランティア養成講座＠上智大学への参加（2018年３月）

上智大学で行われた通訳イベントに主として通訳部の学生が参加した。慶應義塾大学以外の大学も多く参加しており、200名近い学生を対象として２日間のプログラムが開催された（図16）。初日は座学を中心に、これまでのオリンピック３大会でボランティアをされた方の実際や、1964年東京大会で通訳をされた方の生の声を拝聴することができた。二日目はグループワークが行われ、多様な言語の必要性を認識する機会となった。

図16

■まとめ

図17は留学生向けの大学公式パンフレットの取材風景と当該ページである。上述のように2017年度にいくつかのプログラムを遂行してきた結果が繋がりをみせている。体育研究所がサポートするプロジェクトではあるものの、多くの慶應義塾大学教職員によるサポート、関係企業のご厚意なしに現在はない。多くのご理解とご協力にこの場を借りて、御礼を申し上げたい。詳細については次年度の活動報告書に譲るとするが、2018年４月新入生入学によって、これまで登録していた学生約250名を大幅に上回る約500名の学生がKEIO 2020 projectに興味関心を持ち説明会や会議に主体的に参加し、KEIO 2020 projectに登録した（図18）。2018年４月には、組織再編に向けた会議が重ねられている。2018年度の活動は、未来先導基金の採択を受け、さらなる飛躍が期待される（採択名：KEIOスポーツレガシー －東京2020オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】代表石手靖君）。塾内のオリンピック・パラリンピック関連専門家との連携を強固なものにし、慶應義塾大学と学生に残る生きる力を備えたKEIOスポーツレガシー構築に尽力したい。スポーツボランティアをするためのプロセスを大切にして、今後も体育研究所は学生をサポートし続ける。

【文責：稲見崇孝】

図17

図18